



利
36分
か

東京大学
学芸部
蔵書

六卷
初
九

玉緒線分 波卷

○不ぎのいまど独らぬをわけていふときハ志といふ云

△此こと一首の分のうへそそきも多うべし今思出

るハ後撰中小作中をく取床麻ハせ中字代中多きけバ取麻中せ

ら中を中オ二勺ハ未然を云なりオ又勺ハ現中然る云云へるか

て中そそ一卷中線分小図せる如く中を中境中のあり中そそ中なる

奇ハ独多うんとぞ中のや何中の結び中となれるハげ中いまだ中足中覚

ど中志中れ中ども中む中ら中ん中の中づ中まり中と云ことハ活雜三編小云へる

が如くならん中は中状中に中截断言中に限るとも云ゆ中く中連軒中云を

兼ぬと云べし中あ中る中が中さ中り中心中し中て中れ中バ中ぞ中の中や中何中れ中結中び中さ中る中事

ふたりと云ひうまると云ふへつゞるるこまへづゝるありり。
 ありくまゝあるうまると云てあつてをあらはるゝありり。
 ありりとはいまづる例ありと云ことこれハ出雲國造君の考へ
 ましたることだに然る事とぞ思ふるゝたゞ一文章よそハ
 さのこわれがらふもあらぬ難き致なほよく考ふべき義あり。
 〇まべてありといふ辞ハ皆尔りやのつゞりあり。
 △まことに然るや否や、推考ふべきことと思ふ、其故ハ連射を
 受るありハかの「えゆるありり」おつるありり。かどのありこ
 とこそ「実々」尔りやなること又まも云まづれど、截断を交
 るありハ然云難しから「すやあり」おつあり。夢をあり。かどの

ありを考ふべし、やうく云ひをそゆるけは同じまし、たつべきか
 なれど此を尔りやのつゞりとはふと云難し。
なま 一巻 廿一 の縁を並小活語雑話 あり の解 合せ考ふべし、射言は
 受ふるハこゝ小出せる「か」宿所の「あを」ねづの「か」のあを。な
 どハ「か」のホウを「な」なりといえさるゝかとハ却りてきこえやれ
 らぬ。似れど、此射言のけのありハ「か」用言の連射を交る
 には同じきと、截断を交る。
うの人、ま、まの 小同きと、もうちみ、こゝ
多きありの如き
 き処、ありと云べきや、かくてその截断を交る小らなうハ同
 おきありとみるべき分りのハ、射言二つあるありたること、
 尔りやのつゞりとのこたえ、まも云うべし。

とすきバツやまうるしと。

△が小定格有るなり、然し歌仙集の中、赤人集といへる小^{十二}三^八五
 なるハなまがき物をこよひひとふらうべし^一やをこくあふ^二く^三て^四躬恒
 集^五ハ^六あ^七こ^八を^九ま^十げ^{十一}か^{十二}れ^{十三}あ^{十四}へ^{十五}り^{十六}の^{十七}左^{十八}小^{十九}君^{二十}う^{二十一}ま^{二十二}う^{二十三}さ^{二十四}あ^{二十五}う^{二十六}づ^{二十七}ら^{二十八}あ^{二十九}り^{三十}
 是らハ何れも心後人の写しむがめりたるべし、くれぬべしや、又
 くれぬづらありと有りたるべし、此字格の悪本志て、抄子定本有
 此玉緒の正統筋をかりて、こかくれむが^三清^四め^五を^六バ^七あ^八れ^九と^十勿^{十一}れ^{十二}、^{十三}由^{十四}て
 ま^{十五}こ^{十六}か^{十七}あ^{十八}ら^{十九}ふ^{二十}日^{二十一}記^{二十二}小^{二十三}多^{二十四}を^{二十五}も^{二十六}仏^{二十七}を^{二十八}も^{二十九}と^{三十}ち^{三十一}あ^{三十二}る^{三十三}べし^{三十四}や^{三十五}め^{三十六}ち^{三十七}の
 るま^{三十八}づ^{三十九}や^{四十}と^{四十一}あ^{四十二}ら^{四十三}を^{四十四}や^{四十五}め^{四十六}の^{四十七}考^{四十八}へ^{四十九}て^{五十}、^{五十一}ふ^{五十二}ら^{五十三}り^{五十四}乃^{五十五}く^{五十六}ら^{五十七}、^{五十八}し^{五十九}か^{六十}る^{六十一}。
 べら^{六十二}此^{六十三}数^{六十四}ひ^{六十五}乃^{六十六}ら^{六十七}、^{六十八}あ^{六十九}や^{七十}ま^{七十一}う^{七十二}り^{七十三}な^{七十四}ま^{七十五}つ^{七十六}ハ^{七十七}な^{七十八}ま^{七十九}お^{八十}と^{八十一}ふ^{八十二}て^{八十三}、^{八十四}あ^{八十五}く^{八十六}れ^{八十七}、

ウの用ゐるべしのと
 又山口梨下又活雜(八三)

八五

○さて又自他のうらまおて云々みづりにまづくべし

△あれハ活小より、辨へおくべきと有り、但し自他と云ふ中
 小も自ら然ると他の然るとの二つとこらう、つり、又自ら然ま
 と化をしてあうせむるもの二つとこらう、なごあて、あけ、こせ
 ハ近頃いでせむ、詞通路ぞれももこほやうなま、ゆきてこべし、又
 活語雜話小いへる如く、うのあ、ハ障子あどしてハ自らのう、將小
 然らんとせむハあうんと云ひ、あご然らば、ハあうと云ひ、それ
 をあご、つらむ、わなれらぬ、さき小云ときハあうと云ひて、その詞
 を紐鏡下の六段の格あり、さてこあら、つり、化をあら、あむる、

こころのまくに教るわらハおりもせよと云てのさほ小きこ
 めれバ^ち。ちん^〇と頼ふはあささるべく教り^〇ちん^〇と此後
 の^〇云やう小思をるれバありかくて此^〇ちん^〇ハ聊言得がこ
 きに似れどあれハ花の教るを頼ふは^〇い^〇べ^〇先^〇と白みし
 君の其優^〇び^〇末^〇ぬ^〇小^〇花^〇ハ^〇か^〇く^〇さ^〇ら^〇る^〇が^〇今^〇日^〇ハ^〇そ^〇う^〇あ^〇り^〇た^〇ま^〇ひ
 て^〇此^〇盛^〇り^〇け^〇あ^〇を^〇れ^〇を^〇今^〇一^〇と^〇む^〇ハ^〇賞^〇む^〇ふ^〇や^〇と^〇そ^〇の^〇人^〇を^〇侍^〇え^〇よ
 と頼ふ^〇意^〇の^〇ち^〇ん^〇なり^〇此^〇奇^〇よ^〇そ^〇つ^〇ら^〇る^〇向^〇き^〇の^〇人^〇が^〇侍
 情を^〇あ^〇れ^〇と^〇み^〇え^〇る^〇猶^〇り^〇教^〇あり^〇あ^〇ら^〇う^〇に^〇この^〇哥^〇の^〇も^〇う^〇ち
 と^〇祢^〇ち^〇ち^〇ん^〇へ^〇ん^〇を^〇あ^〇と^〇ち^〇ん^〇お^〇た^〇ら^〇ち^〇ん^〇な^〇ど^〇の^〇ち^〇ん^〇も^〇同
 意^〇の^〇ら^〇ち^〇ん^〇あり^〇と^〇知^〇べ^〇し^〇控^〇い^〇を^〇古^〇今^〇ふ^〇花^〇の^〇ど^〇と^〇よ^〇あ^〇ち^〇

らバさうして一芳々又ととりき^〇ち^〇ま^〇ち^〇後^〇撰^〇ふ^〇雲^〇深^〇の^〇く^〇馬
 の^〇山^〇入^〇る^〇人^〇を^〇あ^〇と^〇ち^〇ん^〇も^〇ゆ^〇り^〇き^〇ち^〇ち^〇ん^〇この^〇二^〇首^〇を^〇な^〇く^〇べ
 考^〇あ^〇を^〇り^〇七^〇字^〇句^〇を^〇と^〇の^〇ゆ^〇ら^〇ふ^〇及^〇ぶ^〇ま^〇ど^〇く^〇六^〇字^〇と^〇そ
 い^〇ひ^〇て^〇よ^〇う^〇人^〇ゆ^〇て^〇も^〇り^〇せ^〇ば^〇同^〇ど^〇来^〇字^〇と^〇當^〇ら^〇語^〇を^〇ら^〇古
 今^〇の^〇ハ^〇ゆ^〇り^〇き^〇ち^〇ち^〇ん^〇と^〇云^〇べ^〇く^〇後^〇撰^〇の^〇ハ^〇ゆ^〇り^〇こ^〇ち^〇ち^〇ん^〇と^〇云^〇を
 き^〇た^〇り^〇一^〇首^〇の^〇全^〇射^〇然^〇る^〇と^〇誰^〇り^〇あ^〇れ^〇を^〇辨^〇へ^〇さ^〇う^〇む^〇あ^〇ら^〇る^〇に
 是^〇を^〇七^〇字^〇句^〇と^〇ら^〇の^〇へ^〇ん^〇と^〇ハ^〇こ^〇ち^〇ち^〇ん^〇と^〇云^〇頼^〇ふ^〇意^〇の^〇か^〇この^〇ハ
 き^〇ち^〇ち^〇ん^〇と^〇い^〇ひ^〇き^〇ち^〇ち^〇ん^〇と^〇云^〇て^〇後^〇の^〇と^〇を^〇批^〇評^〇する^〇意^〇ハ^〇ゆ^〇り
 恒^〇の^〇ち^〇ん^〇の^〇方^〇の^〇ハ^〇き^〇ち^〇ち^〇ん^〇と^〇い^〇つ^〇り^〇此^〇ゆ^〇り^〇来^〇ち^〇の^〇ち^〇ハ^〇去^〇の^〇將
 然^〇云^〇それ^〇を^〇更^〇る^〇辞^〇ふ^〇ま^〇ち^〇り^〇ち^〇ん^〇も^〇ち^〇り^〇と^〇略^〇圖^〇の^〇丸^〇と^〇あ

いみじき語りありきさうふよりて同書四編

(八六)の条よこれに審うにせり、披らきえて上

○ふさ[□]山[□]ハ[□]え[□]け[□]せて[□]へ[□]免[□]と[□]免[□]と[□]より[□]は[□]び[□]り[□]と

△此[□]え[□]け[□]せて[□]へ[□]免[□]と[□]免[□]と[□]、何[□]も[□]將[□]然[□]と[□]云[□]方[□]よ[□]て[□]見[□]べ[□]う[□]の[□]四

段[□]の[□]活[□]き[□]語[□]と[□]も[□]小[□]あ[□]る[□]べ[□]し[□]る[□]時[□]ハ[□]加[□]さ[□]る[□]ま[□]ら[□]よ[□]双[□]ぶ[□]り[□]と[□]あり

き[□]あ[□]ち[□]い[□]み[□]と[□]よ[□]あ[□]る[□]方[□]よ[□]ま[□]ぐ[□]つ[□]る[□]勿[□]と[□]免[□]と[□]ハ[□]術[□]を[□]読

え、或[□]ハ[□]友[□]鏡[□]或[□]ハ[□]略[□]図[□]を[□]む[□]ろ[□]け[□]る[□]人[□]の[□]考[□]よ[□]云[□]、此[□]ハ[□]紐[□]が[□]み

よ[□]て[□]ハ[□]考[□]へ[□]、[□]示[□]な[□]く[□]空[□]談[□]小[□]な[□]る[□]有[□]り、ハ[□]術[□]よ[□]て[□]將[□]然[□]連

用[□]の[□]二[□]つ、[□]四[□]段[□]の[□]活[□]の[□]語[□]よ[□]て[□]ハ[□]加[□]さ[□]る[□]ハ[□]ま[□]ら[□]と[□]き[□]あ[□]ち[□]が[□]み[□]と

合[□]る[□]を、[□]下[□]二[□]段[□]の[□]活[□]語[□]と[□]も[□]よ[□]て[□]ハ[□]其[□]二[□]つ[□]を[□]兼[□]ぬ[□]る[□]は[□]い[□]と[□]よ[□]く[□]み

え[□]分[□]る[□]、[□]結[□]よ[□]み[□]と[□]、[□]猶[□]ね[□]む[□]よ[□]う[□]、[□]示[□]を[□]い[□]と[□]く、[□]上[□]七[□]下[□]二[□]段[□]の[□]活

上七下二

と十行こくく云云才四の音えけせて糸へ免え免ハ四段の活

の才一の音と才二の音とをわけて云云受る一にをえとその二をり

めて用ふといつり、此圖並辨論をうつし取て、其將然連用の二

つをくわつるが下二段の活語のえけせて糸へ免え免たるを

ハ、い、ト、童、童、もたちまちに免れと思ひて、[□]き[□]等[□]の[□]その[□]へ[□]と

の免ちへうけて、そのえけ等[□]の[□]十[□]音[□]を[□]圖[□]し[□]免[□]る[□]あり、[□]此[□]圖[□]よ[□]つ

き[□]そ[□]此[□]十[□]音[□]を[□]ハ[□]今[□]ハ[□]右[□]四[□]段[□]活[□]語[□]よ[□]て[□]ハ[□]才[□]一[□]音[□]の[□]加[□]さ[□]る[□]ハ[□]ま[□]ら

よ[□]ら[□]ら[□]ぶ[□]う[□]よ[□]て[□]み[□]て、[□]そ[□]れ[□]を[□]免[□]る[□]人[□]の[□]こ[□]を[□]今[□]こ[□]よ[□]け[□]云[□]を

る[□]あり[□]と[□]あ[□]る[□]べ[□]し、[□]略[□]必[□]小[□]な[□]ん[□]と[□]せ[□]る[□]人[□]ハ[□]い[□]と[□]ゆる[□]免[□]の[□]免[□]ハ

なり、こくに論ぜる、預ふ意の免[□]ハ[□]免[□]ん[□]と[□]い[□]ハ[□]せ[□]る[□]と[□]い[□]る[□]あり

あんたり、已達の人ハ向まりたるり、
 意家初学の為小とかくまでハ云ふ、
 交る時え自らさうられど、
 思えられバありハ、
 是ハとを辨し易くぬ辞たるし、
 であるまどき辞たる由をもくろへきたるを、

十五
石細

○来ハくた、
 △か、云ひてハ、
 へびるとも云、
 たり、然定めたる時ハ、

あ、
 掛き人のあ、
 かの、
 一ハあり、
 なれば、
 そのいと古くハ、
 いら、
 し、

○来と云詞の活きハ、
 たどあきを、

○玉のをり分

○紫十七

○万十七 海とくき次きちか月にいづとよくある

△あは十七卅一丁より卅三丁かけての長き新なり、一首の趣をりていへる玉の緒の説かれば、こなる二義の考げ小よく云々、きそり、其中小後ある説小よれば、こなる長哥のある概、初ある説小よらま布ある思はる、方より試云小、波夜久奈里。那年と書る里、こなる良の語まける、ハ非る致、

○まべておぶさこのちんの上のかくまハ、まを渡のこ、そのや何まどの辞をたく例あり

△け小然り、されハ此ちんハ上こハまういへる如く、なめと活らく、こもたうくま、まどく云ひも、うへられぬあり、まどくとに花の

盛ハありあめど、とやうにいへるこ、ハあまたあれど、ああるあ、と根小云、たえそち、されバ、その、あさこのちんの上のかくまハ、まを渡のこ、とはいへるある、まはあれど、稀小の乃、結むとなれるハある、とあり、又やの結も、稀ハ、ハと思もる、こもあき小、ららば、そのよう、まの縁分、云へる、が如し、

○後後拾き十七云

△あ、の、落、白、ハ、う、つ、た、く、お、り、ひ、ま、り、ち、ん、の、字、語、な、る、べ、し、世、間、と、我、ち、上、ほ、へ、る、彩、ち、れ、や、あ、ま、つ、れ、ど、離、ち、ざ、り、り、り、と、云、居、ら、如、く、夏、き、ち、夏、き、世、相、離、れ、ぬ、ハ、世、を、厭、て、後、ぞ、知、り、た、ん、厭、ち、ぬ、布、ど、ハ、厭、ひ、だ、よ、せ、ば、夏、き、と、離、ち、ち、ん、と、思、ち、る、れ、ど、も、

境ぞのや何の結びよそこれをまうくといへば紐鏡衣の仍り小志て
 こその結びとなることなりこれハ「まま」を活うね詞とのこと云ひ
 がさしうろがを小わがうろハあく回よは用語の中へをさめたゆか
 よく考ふふべい一巻卅五丁はハまくうろね評はいい
 の縁とけけ小のをろうかをとしし
 ○ままいかをと上よいへた。お又まいいひて結ぶ格へませをま
 も同ド。

△これハ下小ままいいと云て結ぶ處の同ドきを云へるのとなるをし
 そハげ小さやうなりりかまいいかをとませをとを同一ことい意
 得たをそけひうとなるべしまいいハ已然云うそこその結びと
 なる詞ありおれをけとるをハおけを引こたをあといつるを小

同ド略圖一どが小双べ出せるぞこれたる又ませハまくせの省
 り言の粹然言なればこれを交たるをハおけを取らをまど云へ
 るを一同ド略圖小すでいぬ縁一並べるをあり但ままいいを
 又まいいとむままどようもれバままいいかをとませを知などのをある
 人欲とある人とあるべくめどきよなうらびをいさまいつる如くままいい
 ままいいといふの同并を全く後のていをして
 未だ然らざる前より云ふ詞なるかぬのことあり

○ままいいの不
ままいいの

△不可のこといふ人方いよくきこえ易かるべいつの小云へる
 いふままいいの小のままいいのきこえをとませを不可の意とままいいの小云へる
 七ハ真鍔持弓削河原之埋木之不可頭事等不有君とこえも為
 くれバありたいハ下可悉の生張うその考やハある小
 小よべき故ハ云ふれどらるさめハままいいのままいいの小但し不可の二

せらハひがてゝなるよー云われゝるハいと佳し、甚つゝきりこれ
 も千載の現本並び小類句集も、^一夜は濃う一人もわらわく
 三代まであつぬるがきをバセしとみえゝる小付て、此の落句を
 せどと濁りよむハかごとたる由を云ひ、和奇新異竹集もハ、な
 けきをやせしと有る、それよて乞方の意の明なる趣をいされた
 是、是もいとよき論めなり、まろく傍論よあけりといひあハむ
 る人必しつめど、と。と清濁のうりりのころえ又まどとど
 との雅なると俗なるとを初学の上く辨へ並るん料ホ、

○らゝハらんのもゝゝゝゝゝゝ辞して、疑ひのまじと極きゝの
 きぢ免とけ也免れど。云
 云

△古今集遠鏡小、俗云譯志をらんハチマロウらゝハソウナ、
 あるハ、まこととに從ふべし、されバそ、小疑ひのまじと極きとと
 云へるも從ふをハえつゝぬとなぐらゝハらんのもゝゝゝゝと
 有ハハうゝぞや賞也、是より去て次、^次あはしあはしをを
 あらん、あんの活とハ云へるなれど、さよハつゝじ、そのよーハ
 次よ云へし、まづらんハらめと活くとハ、^{四十一}ある^{四十二}図示
 てもあるく、そハ大方の^{モウ}活用の類ひてそのまぢよく、^{四十一}く
 ろゝれど、むと云麻行の音の、と佐行の音小活らうんといえ
 きなり、是ホよろてらんらめとらゝとハりく異なるとのぞ
 云べき、况やあらんをあらしと活らうんと極よハいふく、云べく、^{四十二}ある

△あれも上よりいへる如く、きりらししそあるらしをあらしと云へ
 ると何例たるべく、これのこきらんとハ活々むなど云べきよは
 あらげらべし、万葉よ、きりむや、らるハ、返あくもきりもきり
 きり。きり。と活々語の將然言ら、りどよりむとつらなるならん
 し、これをきりしと云時のら。ハ下の。小つき、きりむやと云へ
 るら。ハ上のきりつけらなるよりよく考ふべし、よるべくりきりしを、や
 がつ依可有来有良之ならむしくも上よ云へるが如し、

老九

○ておぬつて

△古来て、いなるがうづ。ほどあるつ。など云ひ、ちううはのみ
 志き秘めこのやうよ云ひ、らふもあめらハ、をうきり、あり、おぬ

お徳たるる辨別こそ、ささいへど世ふをぐれ、る物織の説、いり
 実詳なるも、ごもなり、れ、あ、れ、此、て、お、ぬ、つ、て、といふ詞
 づくひ、た、け、お、し、ら、う、ん、て、よ、似、る、つ、て、と、ま、る、今、少、し、勝、り、ぬ、べ
 き、か、詮、ハ、つ、ら、つ、ら、活、く、語、の、截、る、た、る、を、二、つ、ま、わ、り、お、て、ハ、用
 云へ、連、く、語、辞、と、た、る、る、り、さ、る、か、う、よ、う、の、ほ、ど、あ、る、と、名、け、ら
 ん、さ、ぬ、た、る、意、ハ、何、と、お、て、も、皆、有、し、と、ぞ、思、は、る、次、の、考、考、べ、し、

○折てハらるく。つハ狭きゆを云云

△つハめ、て、つ、つ、つ、と、活、ら、く、詞、の、
 の、き、ら、く、辞、と、ら、る、つ、の、二、つ、ま、な、り、た、る、り、の、た、り、ま、う、あ、て、お、用、云
 へ、つ、く、語、と、な、れ、り、う、ら、う、ま、お、て、と、云、ハ、異、な、れ、ど、て、ハ、と、

連用云なるを、つゝも亦愈る其如よく似しるなり、ちてこれこれ
 を示して、あまをいつかまをとおまうへてまをのひ。はあ
 小。上あのみり。下にひる。たがひあは時におまうらる。あそ
 の中間すおく辞に。とハげよく論まうり、まことに然るてあ
 里、甚うれとこれとまうへるを云とせゆるがそれハち用云と
 用云のらひつぐく、そぞらう、さてこたなる、あふ促ひて推考
 るに、きま、詞を二つらひひて連用云とせるハ、まう上下り云と
 の互小同時、まうらる中間、そぞ云なる、万葉小、かま、そぞ
 い、ちともあり、為、々、あり、た、兼、々、などこれれあり、十四
 の丹、丁、小、梓、ら、末、尔、玉、ま、紀、か、須、酒、曾、宿、奈、莫、あ、ま、に、た

くをうぬく、あ、の、兼、々、も、為、々、も、つ、く、同、類、の、語、例、な、り、古、事、記
 傳、七、走、乍、を、こ、く、と、う、小、回、く、凡、て、古、字、古、書、ハ、必、都、々、と
 訓、例、な、り、都、々、ハ、此、事、と、彼、事、と、相、交、る、と、き、其、間、置、く、辞、な、り、此
 ハ、走、も、し、讀、も、して、二、事、を、相、交、へ、て、為、る、な、り、と、云、ひ、又、走、々、讀、
 とも走りながら讀、ともいふ、同、故、この、字、を、後、世、ハ、那、賀、
 良、とも訓、なり、凡、て、都、々、と、那、賀、良、と、通、ひ、て、せ、ゆる、あ、ま、物、語
 文、を、ど、一、必、都、々、の、い、へ、き、を、那、賀、良、と、云、る、例、あ、り、と、ハ、小、謂
 せ、し、る、こ、と、小、で、か、く、て、こ、一、為、々、兼、々、又、り、く、な、ど、ま、へ、て、事
 二、つ、交、ち、る、小、で、用、言、よ、り、用、云、へ、達、く、例、明、な、り、漢、籍、読、お、も
 今、春、看、又、過、と、云、へ、る、な、ど、見、る、と、ま、う、ら、る、の、二、つ、ゆ、え、み、り、く、

いへるよて、見つ、過ぐと云ふ大く同くして細くにいへばけちめあ
 万葉小、玉藻かろくと云ひ、其同じく玉を亦ハ玉も并つ、
 とも云る哥、つり、次、引て云ちん、あれ、まこれ、を、あつ、つれ
 をも相ま、へ、ま、る、を、い、つ、り、兼、々、ゆ、々、ま、々、え、ろ、く、ま、ど、皆
 同く格あり、万十二^十、た、れ、あ、て、恋、つ、つ、ろ、ど、ハ、ま、ま、の、浦、の、あ
 万有申尾珠藻^{ナラニレラタモモ}、同十一^ナ、な、う、く、小、君、尔、恋、む、ハ、ま、ま、此、浦
 のあま有申尾玉藻^{タモモカリツク}、管、か、く、か、り、つ、つ、と、い、る、と、か、ろ、く、と、云
 へると大く同くきを考ふべし、なほ、い、ま、此、哥、彼、哥、と、い、
 たるも、ま、う、て、も、た、く、此、十一、毫、なる、川、管、を、直、ち、小、或、本、玉、
 川、例、と、つ、り、と、云、ふ、も、即、ち、万、葉、の、其、处、に、え、たり、然、を、い、れ

ど、か、り、つ、つ、た、か、ろ、く、た、い、づ、れ、に、云、て、も、よ、れ、処、つ、り、又、い、づ、れ、
 一方小必云べき処、あるハ固よりあり、ま、ま、ハ、ち、右、万、十一、を、依、ハ
 いづれ小云ても、い、く、か、ろ、ぬ、の、た、ら、が、也、え、小、或、ハ、い、ろ、く、毫、
 或、ハ、か、り、つ、つ、と、せ、る、本、つ、ろ、た、り、又、十二、毫、なる、ハ、二、の、句、不、
 ひ、つ、つ、と、い、る、ゆ、え、毫、句、小、亦、又、か、り、つ、つ、と、云、て、ハ、よ、く、
 か、ろ、く、と、云、へ、る、ち、り、又、あ、れ、を、心、付、れ、ば、二、の、句、を、
 悉くあ、い、む、ハ、二、の、句、を、玉、も、り、つ、つ、と、云、て、ハ、い、と、
 也、え、然、を、せ、ざ、ら、ち、り、ん、を、つ、け、て、考、ふ、べ、し、上、小、
 い、へ、る、ま、う、で、小、云、へ、る、を、も、考、ふ、ま、ち、り、そ、こ、に、は、ぬ、ま、つ、つ、と、ぬ
 起、す、
 る、ぬ、ろ、と、を、引、例、志、き、ら、小、云、へ、る、か、ろ、く、と、か、り、つ、つ、と、の、例、と、
 二、毫、上、へ、ち、り、
 て、ろ、ろ、格、も、を

小いよく証をべし、さて二巻廿六丁小、新古十八のうねるが、云
 さる、かのはく、と、つる方を一本、ハ、さる、かのはくとありそ
 走もよる、と、有ハ、論もる意趣もつ、別のところ、これハ、あ
 り小志れ、さる、我をづ、行、意、蒙の為小かくも、く、じき、を、る、り、
 して、古事記傳十八の十七丁小いとよき、さ、れ、ど、の、つ、る、中、小、も、殊
 小つ、ハ、相、交、依、二、事、の、中、云、ま、さ、へ、さ、事、の、か、ろ、く、て、か、さ、つ、
 一、あ、る、方、を、つ、の、上、い、ひ、重、く、て、主、と、あ、る、か、さ、を、下、い、ひ、定、
 り、な、ど、云、へ、ら、実、小、精、き、教、あり、從、ハ、さ、る、べ、ル、ん、や、さ、て、此、玉、緒、の
 つ、の、母、小、さ、り、添、へ、て、古事記傳六ニ同十八ニ又同十九ニある、解、釈、を
 ども考へ合はべし、但し、序、小、それ、を、も、聊、さ、さ、め、を、ん、の、記、傳

六ニ丁 小つ、ハ、且、且、の、約、り、た、る、欽、と、つ、る、ハ、少、一、从、ひ、う、ぬ、る、ち、り、
 上、い、へ、る、如、く、さ、く、く、ぬ、く、の、類、小、て、て、つ、つ、つ、つ、と、つ、ら、く、
 甚、截、折、言、つ、を、さ、る、の、い、へ、る、の、と、云、う、て、事、た、り、ぬ、べ、あ、れ、を、
 あり、う、の、此、事、を、し、な、か、し、彼、事、を、交、へ、さ、る、あ、ら、が、か、ろ、き、か、さ、
 を、上、小、い、ひ、ま、ま、む、ひ、と、あ、る、か、さ、を、下、い、ひ、い、へ、る、ま、ま、と、
 小、若、く、ま、こ、と、小、美、志、き、解、あり、十、の、九、丁、已、下、に、近、而、い、
 か、べ、き、處、を、都、々、と、さ、む、こ、と、多、く、こ、ハ、誤、つ、と、よ、む、べ、き、處、を、
 互、と、云、ん、ハ、可、一、互、と、云、へ、き、を、都、々、と、さ、ひ、び、ぐ、て、此、意、を、さ、く、
 辨、ふ、へ、一、近、世、ノ、歌、道、人、の、い、ふ、都、々、の、説、ハ、叶、ハ、ぬ、こ、と、た、お、し、
 何、る、こ、ハ、美、つ、く、も、と、い、は、い、ま、さ、ま、ド、れ、ど、ま、づ、若、き、せ、り、と、ぞ、た、い、

屬などのおさのうらふなき時のてたる小さう時代の所國のまたる文字のつらひさまの、遙かる後小まふ来し韻書と其旨まことに符へるが妙なる趣奈万之奈こ云へる如し、さて論語小、毋敢而行簡、いづる而なと雅語こハ必マ、まゝなづ、小業をるこ、熟く味ひぬべし、たゞど考べし、

○新六田子語うに云、つ、げのハ云、よろふいぬ、うぞ

△白妙の乃のハぬるへくる小ハ、うでたゞ雷をばいへる、うと、白妙の言とつづく間、ふ、け言、根とハ、扱める小ても、いれん、然るときハ、白妙のといひて、雷ハぬりつ、といひ、云、小余、意にりて、あるならん、序小の、此朗詠新古今、小万葉を改めた、とやうを、ハ、評めて、ふ、と、ふぢとを混ぜる、け、た、よ、ど、云、ふ、め、つ、た、う、な、う、た、う、ひ、が、た、な、る、べ、し、あ、う、く、る、語、を、誤、て、眞、士、小、冠、ら、せ、た、る、よ、て、ハ、め、と、よ、り、な、う、る、べ、し、句、を、へ、ど、て、雷、小、く、く、る、白、妙、の、

と云、い、こ、そ、き、こ、ゆ、れ、又、因、小、云、此、奇、の、つ、を、神、代、よ、り、雷、の、降、に、く、きて、い、る、と、云、と、つ、ハ、続、く、と、云、と、な、り、と、い、ひ、昨、日、も、あ、り、つ、今、日、も、あ、り、つ、と、云、と、な、り、な、ど、い、つ、る、を、さ、さ、く、け、う、た、ま、き、と、れ、こ、こ、た、る、を、か、し、但、白、妙、の、を、若、へ、う、く、る、も、謬、な、り、と、云、へ、る、人、あ、れ、ど、こ、ハ、万、葉、ま、も、つ、の、白、妙、は、淡、君、を、降、と、や、う、小、用、へ、る、を、も、考、へ、き、ま、り、

○お、お、よ、そ、云、て、い、が、か、ハ、塔、濁、り、て、形、小、云、え、

△て、い、が、か、ハ、塔、濁、り、て、形、小、云、え、と、い、つ、る、ハ、諾、ひ、難、し、あ、つ、な、ル

い、つ、る、小、か、を、清、む、と、濁、ら、し、の、二、つ、る、例、よ、て、て、い、つ、る、を、よ、も、そ、の、

二、つ、る、へ、き、理、り、を、よ、り、な、う、る、が、う、へ、小、ま、で、小、鏡、後、採、九、か、依、

む、う、り、を、ば、む、ら、の、葉、に、や、う、と、き、て、林、の、ま、と、ま、さ、あ、て、い、つ、る、を、

い、つ、る、を、改、め、く、廿七 右細 小、出、し、て、毛、ハ、つ、の、う、ま、と、い、つ、る、を、よ、り、考、

ふべし、さうぞう禮奇めづらうも見えさうぞうむた、こぼつても理り、その
 のこもいさうさうなるを、されを此書、一巻小、そのや、何こそ
 の語ひ乃証奇の見書、思出さうハ少く、ねど、それ、何れを
 き起、必を物、おる、か、如く、ふ、こ、めて、し、を、其、う、う、る、語、か
 どを、も、言、得、お、く、べき、し、ふ、こ、そ、ら、も、然、も、バ、こ、の、い、ひ、さ、後
 も、ら、う、ん、と、云、べ、し、されど、亦、ハ、これ、れ、ハ、其、処、彼、処、と、ら、さ、う、ぬ、て
 みる、人、の、た、め、小、其、実、ハ、互、ひ、小、つ、ら、も、其、手、後、い、さ、う、よ、し、と、云、ハ
 なく、へ、も、云、べ、う、ら、ん、と、云、て、志、ガ、ハ、必、用、言、を、う、け、ら、が、ハ、必、解、云、成
 う、ら、ら、別、ハ、られ、ど、志、ハ、う、り、な、し、此、義、く、も、く、ハ、活、語、雜、語
 (六九)の、糸、を、み、て、知、べ、し、

て、し、が、云、此、外、万、葉、も、有

△万ハ三_一八_二十一_三二十_四など、を、て、種、多、う、り、志、が、と、て、し、つ、け
 る、の、こ、た、り、う、て、それ、を、今、一、段、解、き、み、ま、バ、あ、ら、ハ、り、と、し、こ
 が、と、つ、つ、た、り、あ、り、自、辨、預、ふ、志、と、云、べ、き、た、が、あ、り、それ、へ
 初、く、ね、語、辞、よ、う、つ、つ、な、り、て、ハ、も、が、と、代、り、初、く、語、辞、と、連、て、は
 志、が、と、なる、あ、り、志、ハ、彼、き、あ、ら、と、活、き、て、さ、ま、を、示、し、を
 其、それ、よ、つ、び、き、て、預、の、が、つ、け、バ、據、麻、し、て、し、か、る、ど、未、来、を
 こ、そ、云、へ、る、な、れ、と、や、う、も、初、学、或、ハ、誦、う、め、く、と、ハ、過、去、せ
 ん、と、を、の、ひ、て、未、だ、来、ら、ぬ、さ、き、小、云、し、を、何、ら、な、り、う、ま、く、味
 不、な、し、

右二七

古風の部

○古事記と日本紀と小云耳きき詞がハおわくれどもて小を
まにいらりて々古を集よりこちこちそのへと。かえり内
くておとねるまとなり。

△そとと云てきこといひゆるるるをバたぐ古への一格といひ又
古を集よりこちこちハハ格なり。次下七 右細 など云へると此てよを

まにいらりて々云えりまをいひくそ。おとねるまとなり」と云

へるとハふと云れば自語の相遠せる小似るるこれ今少し云

ひやうあるべしゆをうりく思ふ小こそと云て形状言のき又

志きこそこのおとねるまを二まをよき。紀十一、おのが妻許増

虚曾

珠者

の十二

まこと示せり、かくて又思ふ小問ひうらるかハまづて連駢言を
 受る定り、問うらるかハ、截断言を受る定りの辞あるハ、みき
 みきや、うつらうつらや、何ぬらうつら、何ぬやの類ひ博く老へし然る
 小かくめ、小つらら小うもやもあるをえれば人のめくめをも截断
 連駢二をうぬら詞とせらるゝめしうらうらがや、ふふの因、区示
 かりのせしあり、

○はまこのひあると云て小をけのそのひよりいふてハ
 云て小をえらばそのへのこハ、云古へのそのへのとてハ別小
 けきむぞ

△そののひといへるとそののへと云へると、うらうらきむくべし

三

右三

偶然とついで風情ハハ非るぞかし、但し此造語乃と、特におく
 け、小い人と思ふと、けり、そこ小むり考ふべし、

○りえら中芳の格と曰く。たぐるあハ百小むとつ
 もんくむ。云

△げ小洞へるあのみふつきをいへば、あることあれど、此是小を
 かさち種々て小をけむぐら「あ」とて、このつきコやぐて出せ
 るなれば、この云ひさばを少し何とらるべく、又中芳よ
 てハさう、コをぬて小をえの用ひさすも、あくある、小を
 是小いづるなれば、それをもち、よてまづこころえなくべく云ひ
 おうんぞよろしからん、
古を兼よりて、このをちりては、めたがよ、か
 けと、とてハ、初学の徒ハ、却て思ふともや、うらうん

卅九
丁の

べて素よりりの辨を
交る小異ることなし

□

○いなといへどあひる志斐のケ云

△志あるとかくへきを板下小書やまれるなうん但しさし
もまぐよけきや筆よりけめどこれハハハ俗語小むくさ
かそ期く物せるよそもはらん平万葉^三の^{十二}は真字よそ強
流とくけるを通本の印点をちシフルとくけるをよこのふ
をひと誤まてるハハのういふをういふも云ひこがを
さびしとも云敷ハハのういふとハハのういふと遠くあつる故
志あつると云てハハのういふをさびるあつるをさびるあといえん
が如くあつるハハのういふの俗云たるハハのういふと今世といへども筑紫

古

人ハ多く「あつる」起つる「起つる」又「あつる」抑つるなど極一のこ
云ひて「起つる」起つる「あつる」抑つる「抑つる」抑つるなど極一のこ
よハをさし「いな」ぬよても「あつる」但し「古書等」も「続紀」荒仁流
と云え、波行の音あつるでも、新撰字一ハ、籙太々礼留、古事記ハ伊
佐知流なども云え、神遺方ハハの類ひの造語少く「あつる」
かの筑紫人ハただ「あつる」上代ハ世ハあつるへて雅一の「あつる」
げの俗び人も云しりのとの云べき「あつる」なるなり、

○「あつる」の語をぬく「あつる」の語をぬく「あつる」の語をぬく
△此ぬくハげハ中芽よりこまこの「あつる」ハをさし「あつる」いと古きハ
多くれど又よく「あつる」ハ古と素よりこまこの「あつる」ハた「あつる」ハ云

まづきありの集トててもとどとあつ物くちあれつまふらうま
のまうども止ぬうなどをみべし但しこころへあつむを
まづおハ授ふるとき又其意んかやと

く知らるく、今世の俗云ハ却りてつねに多く云ひつへるより
考まばよく聞えてはるありあつれやせぬづうてぬなどのぬと今日ド
きぬちめりうて又次なるぬうと、此ぬうと

同じことなるをそのぬくも一首のいやうてあつてはばよおきて一首の餘り
をぞくものへるよりそのぬくもへうとるもつり、二巻は深分小例を出しかり、
集十四卷元、一とせをとよねこめて七夕のあはこよひの月日あり

ぬう、こつても今宵の月日なれうしとこひ預へるよこそはま

○えんをえんまといひ、むるをせまといふ。云

△えんを云ふ二つあり、えんまをえんと活くえんまハ、古くよ
り今小至まうでハまるといふし、さてえんと全く日意よてえんま、

云ハ、さあをせと活きて、えんまるとハ活うざる、それハ今ハ古ニ、
取れりといふべきが如く小たつれり、但し古まありのよて今ハ、みる

をこつてくみまといふへるのよハ、つねに言のころハ同じく、
まじがあらこのえんまを敬ひていへるたる、し、さてむるをせま

と云も、かちと小あまふをうやまひてこちとより云あり、斯て
其言の活きハ、まもむるとハ甚く異りて、さあをせと活、い

つちの上よとのあせまかも、と云るなどの如し、
○んのきせを

△これを何れへの問ひてかえたる、あまこ知んをなどのかこま
く同きあよて、そハむの二つ省りたるりのならん、あまきて早えんむ

ま[□]あそび[□]ふ[□]く[□]ん[□]き[□]あ[□]ん[□]な[□]と[□]多[□]へ[□]ど[□]ち[□]い[□]あ[□]て[□]る[□]き[□]り[□]と[□]云[□]
ひし[□]と[□]り[□]き[□]奈[□]万[□]之[□]奈[□]一[□]も[□]云[□]ひ[□]又[□]く[□]ハ[□]あ[□]く[□]ハ[□]活[□]雜[□]三[□]編[□]小[□]さ[□]て[□]
め[□]た[□]あ[□]り[□]

○十七のまに「万」のなり玉つ市津ハ縁必きを志くらぬ君を免ぐこ
たまえ[□]な[□]こ[□]ま[□]ハ[□]化[□]の[□]う[□]へ[□]あ[□]り[□]て[□]た[□]ま[□]ハ[□]ん[□]と[□]こ[□]ひ[□]孫[□]が[□]ハ[□]こ[□]こ[□]よ[□]
ゆ[□]め[□]く[□]り[□]例[□]ち[□]き[□]て[□]い[□]ん[□]云[□]

△この細註の趣をどハげ小名称る人ハくは志さ感ハ[□]ハ[□]る[□]
わい[□]め[□]た[□]り[□]を[□]今[□]思[□]ふ[□]に[□]万[□]二[□]六[□]暮[□]去[□]者[□]鹽[□]滿[□]来[□]奈[□]武[□]住[□]吉[□]乃[□]淺[□]
香[□]乃[□]浦[□]爾[□]玉[□]藻[□]前[□]手[□]名[□]こ[□]ハ[□]一[□]首[□]の[□]う[□]ち[□]よ[□]て[□]ハ[□]の[□]後[□]ハ[□]ハ[□]ハ[□]那[□]ん[□]と[□]
云[□]へ[□]る[□]こ[□]の[□]二[□]あ[□]た[□]る[□]を[□]某[□]あ[□]ん[□]ハ[□]他[□]の[□]塩[□]の[□]上[□]を[□]推[□]し[□]た[□]かり[□]云[□]ふ

よ[□]て[□]奈[□]武[□]と[□]り[□]り[□]かり[□]て[□]ん[□]ハ[□]自[□]ら[□]志[□]う[□]せん[□]と[□]ま[□]る[□]小[□]い[□]へ[□]る[□]よ[□]て[□]手[□]
名[□]と[□]あり[□]と[□]く[□]ま[□]り[□]れ[□]り[□]今[□]思[□]ふ[□]小[□]免[□]ぐ[□]た[□]ま[□]ハ[□]ん[□]の[□]奈[□]字[□]ハ[□]
た[□]は[□]ま[□]ま[□]ま[□]よ[□]て[□]足[□]年[□]ま[□]ど[□]の[□]あ[□]あ[□]ま[□]り[□]ハ[□]何[□]ト[□]但[□]一[□]人[□]を[□]奈[□]
と[□]い[□]へ[□]る[□]例[□]一[□]ハ[□]あ[□]ら[□]づ[□]る[□]べ[□]し[□]これ[□]ハ[□]免[□]ぐ[□]た[□]ま[□]ハ[□]ん[□]と[□]云[□]ふ[□]
よ[□]て[□]奈[□]ハ[□]預[□]ふ[□]意[□]の[□]た[□]ん[□]あり[□]と[□]免[□]ぐ[□]い[□]り[□]く[□]何[□]き[□]け[□]した[□]文[□]
字[□]を[□]こ[□]よ[□]ハ[□]段[□]の[□]活[□]の[□]才[□]一[□]音[□]よ[□]て[□]將[□]然[□]云[□]る[□]ハ[□]それ[□]より[□]つ[□]い[□]あ[□]
も[□]ハ[□]預[□]ふ[□]意[□]の[□]た[□]る[□]と[□]あ[□]ら[□]し[□]然[□]ら[□]づ[□]る[□]ち[□]ん[□]ハ[□]給[□]ひ[□]ち[□]ん[□]と[□]や[□]
う[□]小[□]必[□]し[□]も[□]連[□]用[□]云[□]ひ[□]を[□]こ[□]そ[□]文[□]格[□]た[□]る[□]と[□]六[□]の[□]是[□]の[□]係[□]分[□]
云[□]し[□]と[□]る[□]り[□]

○後日本紀の宣命の詞よと云

と知べし、さして同じことぬかたれどを略きて云ハ互らむををうてと
云べし、をををやまどがまひつうの詞と云ふりのたうがれはあり、
○スらんスマこと

△これハ中昔小もりぬたその例より、古今小、元とや又らん」と云へ
など、このハ詞ハ衛上卷天なる説宣し、但し少しハちまうの云さ
ま心ゆか、其ハハ活語指南徳重四丁小四をりし、小審小せり、

○け祢をハエ云みぢち小云云けぬへをも云
△祢ををぬへををふふとあてうらに取らんまてて已然言
等松と文たらかその云の連辨云を小と文らる小似通らる
諸活用云へれらる通例とおもらる、三卷ハの係分小いる
がごとし、あてぬふのころを祢と云へる分ハ多くハ上小いま

どとけりそのちき母心ハありといへるうべなれど、諸活用云へ
洩り考もバさのそ小もけり、抑ぬふの意ふて祢と云へる
いと古くよりの語格なりと云へハ古事記傳十一の十丁廿七、小、日本
紀天智帝御坐の、おこのこのやへのひもくく人ふも伊麻拖藤柯祢
からる童語

波ミこのひもくく」とけりも、あぶ解くぬふの意なるよといへる
をちあ、た、祢ををぬふとあてらるなる人多くれど、三卷、係
分小云し如く、あて已然言ををと文らるか、その同語の連射云を
尔と受たも意なる多しと云てけり、まほしきとちり、まほし
今も卅丁右の七行、十の卷又十八の節にけりみちむ云云、けり
細書小万をりて、をも思ふ尔のきちもバ右の祢と同格と云へり、尔と思へを

のこみと同一格なる一ハ淋ろくを又よく意得まへきなり、

○むぢま 云 右のむぢまを皆一つきこそんよりまといひまご。云

△げ 一人よりえと志て皆よくやれど又むぢまのまごこそ

悉くきこゆるやう小思もろそのよう云べれど今まづこの三十

八九なる細註の趣を、採むろくせむ古事記傳のゆきを挙かうん

傳卅二回、○伊多豆淤波受波ハ云痛手負むよりハ云さかり

古語の格こそ万紫一赤あり何れもくわんよりハくこそ

あまぐれといふことをくわんまぐ云云と云り云云は格よくん

こそ人あきてさぐく解けどもめあぐけ処のちをも契沖痛手

を負てハ身もうまひハ入あもありがこころんさまでの疵をも被

らぐバと扱ひありといへるいこもあぐ云云といへりげ小何んよ

りは云云、の釈ハ妙解と云べし仰ぐべし、斯て又あふ小ぢま

のまごこそきこゆるやう小復おむるやうを云んぐまごかくバ

くりあひつてわぐむぢまぬう山のいまのあまごてあまごおを

奇こそあぐバ恋つてある小よりて岩根まきて死よもせぬと云

ころ、又おくまあそのかごそいへる恋つてある小よりてあひ

あうぬかうり、意よおひあうぬあよああひてよとのころ、むぢ

とこふのハ、秋萩のちりぬる花あぐてあるハ恋いつてあるよよ

りてあるハ、中ころの奇ハあまごひ小人とある由意酒つおこ

らぐ、酒小志まめとあり、次々皆く誰へて考ふべし、むぢま

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

文章早の部

○て小をばハ云。あぐまねるそのへなとをなれ物とやあやうん。
 △そハ、坎末小至りてかいていま此をいふ小云まで小をいふの
 のひ。をりえとあつとねるこゝをいふ。と云る如く又上「小みち
 定まねるそのひの有り。此そののひ。とも云へるが如く、此処
 こそ、そののひ」と云ひたらんぞ。一かりぬべき、初巻のはじめ
 小、て小をばハ云。その本末をうまへ。あえ。さる。さる。まをあん
 へ。とらる處をハがひ。あふ。さる。ま。と云へ。と云ひたらんぞ。よ
 しからへきと云ひつる處 （此處） と合せ考ふべし、但し次小をとり、
 はそのの。ま。あ。の。こ。に。え。ら。げ。云。とらる處ハ、終其ま、よて、その

葉の志良世年をちりめとあて古今拾遺後拾蜻蛉日源氏総角枕冊
子とわく引例あて知くさんと八云まじき記なり由を能しせり、

右細

○いとおうく云

△爰一云べきふもゆらぬと序一持いせん、おろくハをうくくまそよ
久、但し蜻蛉日記小園一くけしハの洗ちどハ鈴屋をいりてあられざらん、この日記一ハ
乾くをかくとまめとあるちともまじりぬるをやくひ、又や丹集ちどめはこ
ての上一、くけし舊本今昔物語一、可笑といへる名の故をハ、可受りけれハ蛇けさか
しえくする一扱て定むべし、古昔本よりいれまじり、鈴屋をいりて思ハちど、如御瑞平
満定するをい、健うある、くけし近以可賞可笑之假字の故とて、やくとまき君のまめま
一冊のま、いれく、それも尚まじりやらん、持くハハ假名を千代の古道一、

細付

○紫ノ五十二

△家集一、ちひふるがほのうそとがの字われど、これハ後人の
悲りて書加へたるなるべし、此詞書新古今集一もこえたるよそ得

り知るべきあり、此造語ハ、あも挿ていしと云ひて、抄田前と又
えあひまよとよめるハ、いしじの意なる如き尚り、あててハ文章

の部なれば、事についで、文章か人人の意得となるべきことと
とらえてん、爰一引らる紫式部家集の詞書と合く意、同こと
ちが、新古今そハ、えやうよをくらえとも、此一作りたる人の事
以へて仍あひし、木のうふて七月十日ころ月一きほひてつり
作りられば、とつり、よつり、この新古今と家集とをこまにみれば、

印せらるきり、家集一ことたるちり、抑家集えその家一
とめおくものたれば、別一敬ひ詞をまじり、新古今ハ勅撰よそ、上小
向ひて物申え言づくたるあ、作りと云詞を加へるど、よくん志
とる者ありたり、是ハ誠一文章総言古のまじりの意ゆきなるそ

の便りのまふふくむうの文詞どもをもをりく歌を引
 証するなる小雑へ用めざるごとく云むつるぞかし、さて此
 くりわけをえん人ハ詞の玉の緒七巻・紐鏡・並小和略圖をえ
 暫しも離つまど記々云もわらあり、幾巻幾ひく右左とまう
 てことよ文をハ多くハ省きて奉るれば玉の緒をりくべしと
 事不対^ひたる、甚^ひ処^ひ敷^ひ處^ひ校^ひ一^ひぢ^ひう^ひふ^ひれ^ひつ^ひ、終^ひハ^ひい^ひま^ひた^ひ知^ひれ^ひぬ
 事^ひが^ひぞ^ひあ^ひべ^ひき^ひ、於^ひよ^ひく^ひま^ひゆ^ひん^ひと^ひあ^ひる^ひハ^ひ更^ひ又^ひ詞^ひハ^ひ衢^ひ詞^ひ通^ひ路^ひ言^ひ
 語^ひ四^ひ種^ひ論^ひ、さてハ和^ひが^ひ略^ひ必^ひを^ひ註^ひ解^ひせ^ひる^ひ活^ひ語^ひ指^ひ南^ひ、是^ひら^ひを^ひも^ひ合^ひせ^ひ考^ひへ
 ば、何^ひと^ひれ^ひ名^ひ目^ひめ^ひる^ひこと^ひを^ひど^ひ、と^ひみ^ひ知^ひれ^ひが^ひ記^ひあ^ひる^ひべ^ひし、これ^ひど
 ぞらハとぬれ詞の玉緒と畧圖一ひくとハ、必^ひ持^ひて^ひ有^ひべ^ひき^ひた^ひ利^ひ、

此艸を記しハ、うぞあれハ、や十年丹をとりよたるよ
 を、中書と云べく物あふりしを、詞の及まらべの中と、その小
 うれ播紳家^{世書の序云}へもてありし、いつしとせよ、我
 ありふらる、その頃のをむ写し居る人も、そのゆゑ、みゆある、故、由
 て去年秋あり記い、ゆる詞の道あるべ、故、ハ八年此^{さき}前^{さき}より、平井
 重民の助をゆて改め、並し本をせう出て、更^し校^へ正^し、又、出、並
 させて、題ハ一名の活語指南といへる、か、こ、小、わ、ご、め、て、上、野、必、へ
 おくる、あ、と、り、あ、り、ぬ、る、み、付、て、故、去、校、も、み、あ、せ、せ、ら、る、こ、さ、て
 も、と、思、ひ、て、ま、い、ま、は、を、刪、り、補、ひ、ぬ、る、處、と、あ、ま、い、り、き、ら、る
 こ、よ、り、て、ハ、た、く、人、よ、字、あ、せ、し、を、も、を、ご、さ、勢、ま、ほ、し

きりか、ふけなう、うめを憾ふべきあま、あひをるふ、
 いぐで操本、よをと、あまの人のせめていひま、うめれ
 を、あふを然、ごよなう、あば、うの諸処、よ、う、ん、字、し、ま
 き、ごも、これのづう、う、ご、訂、せ、い、れ、ん、と、て、そ、請、う、ま、う、せ
 て、さう、う、書、ま、う、た、め、ぬ、る、も、天、保、十、二、年、五、月、か、る、を、加
 と、う、う、より、去、年、夏、高、倉、學、寮、う、う、して、語、辞、の、こ、と、の
 辨、説、あ、り、し、つ、い、で、よ、う、ふ、く、の、学、人、う、字、さ、う、め、ら、れ、し
 ぶ、と、ひ、う、れ、圖、示、を、今、あ、し、ら、ぬ、や、う、げ、ふ、い、づ、き、ま、う、そ、
 紙、び、と、ぢ、め、う、う、う、う、う、あ、う、れ、る、ん、と、い、ふ、友、友、や、が、て、そ
 是、諾、ひ、ご、う、小、等、執、る、
其、辨、説、ハ、各、人、ウ、イ、フ、ケ、テ、語、辞
 林、番、記、ト、標、せ、る、一、冊、あ、た、り、

一 躰言用言ともいふ、凡其詞ハ玉緒の序辨の如く、うぐれ、し、在
 有人の身物のうぐり、小お、う、ん、玉のよ、その、の、よう、ご、う、
 は、ほ、う、き、と、た、な、は、

一 言語四種論小曰く、詞を玉け、ゆ、て、小をけ、ハ、緒の如し、詞ハ、言
 物の如く、語辞、を、それを、初、い、ひ、し、た、と、う、う、は、辨、の、詞、小、て
 小をけ、を、添、へ、て、活、詞、と、す、一、そ、死、活、の、詞、等、を、と、又、て、小、を、ま
 して、更、き、連、ね、つ、つ、ひ、初、う、せ、は、美、の、詞、と、あ、う、詞、ま、て、小、を、ま
 ち、う、て、ハ、初、う、づ、て、小、を、ま、ハ、詞、ま、う、ご、ハ、つ、く、あ、る、し、さ、れ、ど、得、ま
 て、詞、を、難、う、る、詞、の、先、う、る、詞、の、中、間、う、あ、る、詞、の、跡、を、兼、て、と、む
 る、活、語、の、終、り、小、つ、き、う、る、
これ、ま、
 う、り、又、つ、く、う、ハ、う、う、を、跡、を、兼、け、又

中間もいろいろでききまもつゞきこゝろ初はつくて小をはをそへて
 六也已上といひつらうべなり、但し種簿しゆぼ一おまうせて詞といへる
 八一切を語をまづか種をて、身 身上下 形状 毎し示し 作用 の
まじり等、こハちまこ一四 語辞 とせし 其初 の三種 のあり、
 種の活といへる 一當なり、
 わが右四種論ををよう一ハ諾ひまがみ少しみちうへてわが
 やうハ一切を語を先二とて、辨と用とありといひ、其辨の中
 一有形のと無形のとろろろ、そ無形の中自らいへる語辞
 なるろろろ、らて用の中小形状作用相別を、そ形状小ふれ
 四の中一初の一が又ふれて二とありとし、さて作用をべて三十二
 箇の活きとをろ中小 自らハちまここの四種并変換等皆撰ま

る事、一ゆけ紙ごふひろぐれを一目瞭然と云らん、一識ら
 まぬべう物したるか、和語説略図あり、かくていもゆる身用とこ
 け、有無形と名ろろやう、ス形状作用のろぢめ等ハ、活語指南初
至 一 弁 ぞろ が 如 如 先 大 辨 を ま の む て て こ の 大 辨 を
 一一首の言一付てとひつて、た高倉奈をそふ一ルる必を
 えてよ、そ の 語 辞 とい ふ の ハ 辨 と 用 と を つ ぬ、
 或ハ用と用と又身と辨と、又用と辨とと、万を貫つきて
 自由ろ、横一子里こいり、豎小千裁こいり、唐くいへた、
 二三世をうけせ世出をの妙用をたふりのあるれとして、こ ろ ハ
 辨論せし小あり、らて其圖といふ也、

用言中形状、々々中現在、々々中く、まきノ活ラキ詞、今ハ深イノ意故、隔語、あむハル用言、連ケリ、如斯ヲ連用言ト云、モ直ニ終言ハツバクトキハふらぎ、又截断スルハ深シ、

終言兼用言ノ連終ノ処ラハ、形状作用用ニ受テ、ソレヨリ使然ノ詞、或ヒハ直ニカ、リ、或ハニ多ク、語ヲヘダテ、モカ、ル例ノ辞、今ハ直ニまの、カ、レリ、

已然言ヲ受テ、廣ク諸用言ヘ、ワタル辞、直ニハ終言ヘ接キテモ、其末ニ必シモ用言出ズ、

つゝ ふうく 如来 をいぬのむし 身 小あれ ぢ

無形終

有形終

亦屬無形終

有形終

コレハ機法ノ二ハ互ル、固ヨリナレバ上ナル罪ニカ、ルハサルモノニテ、亦未ナル、(む)モカ、ル故ニ連用言トアル、

小ハ、語辞ハ、終ナルト用ナルト、有ル中ニ、以哥ナルハ、皆活用セス、小ニテ、終ハ、三、レツベキ、ノ、サテ、ハ、諸用言ノ連終ノ処、ラ、ヤ、ケ、又、二、切ノ、終言ヲ受テ、而シテ、作用言ノ自使何レ、モカ、リ、又、形状ニ言ヘ、モカ、ル也、但シ、小ハ、一、ル、論ハ、別ニ、云、ベ、レ、今ハ、身ハ、終言、ク、ケ、テ、形状、有、ノ、類、ノ、あ、る、ヘ、カ、レ、リ、

無圍八用言、○ハ有形ノ終言、□ハ無形終、其中、□ハ所指アル終言、□ハ非又終言、

無形終言

亦屬無形終

無形終言

の

れ

ちうら

小

西

へ

こそ

ゆけ

モトハ羅行四段ノ活言ナレド、今ハ專ニ一終言ト化リ、定レルカタヲシラセテ、の、ん、の、り、の、ち、の、れ、ト、羅行四段ニ活ラク言ユエ、ソレヲモ知センカタメ、亦、の、り、ト、モ、印、ニ、セ、ル、ナ、リ、

必終言ヲ受テ、サテ、作用ノ中、ツバ、自然言ヘ、掛ル、亦、他人、他物ノ、使然言ヘ、カ、ル、又、形状言、ハ、カ、ル、ハ、ソ、レ、ガ、截断言ヲ、除テ、余ノ、將然連用連終、已然及希求、掛ル、今ハ、カ、ト、云、終言ヘ、直ニ、カ、ル、ル、

如、上、身、今ハ、西ヘ、反、射、語、ト、ウ、リ、ト、上、作、用、言、ハ、カ、レ、リ、ホ、屬、無、形、終、言、ナ、リ、

此、かん、言、愈、察、し、し、物、せ、一、回、あ、る、さ、う、て、此、線、分、又、ん、人、あ、る、ハ、必、知、て、有、へ、き、哥、一、就、て、更、一、又、一、回、を、頭、ハ、一、並

「用言あり、佐行
四段の用きあり、
其オニ多クハ
連用言あり、
乃チ又といふ
用云へつゞき
たり、

「是も無形躰と云ふ屬を、四段の活きと下二段
の二中二段の二段の二の連用云ふ添へて希
求言と云ふ語評あり、こハ凡その定り、
毎形躰言あり、紐後といへるし、紐と後と
なれども、これハ依主といハ凡情の名なり、
これハ相送釈ぞと釈門の人ハ云ふべし、

有形の 躰言
無形の 躰言

「用言あり、麻行一段の用き
あり、之よりカそれハ截るく
連くの二の活用をなし、れガそ
りれバ已ニ然る云とあり、こ
の並びとあり、又とのこまれ
む將然連用の二つの活らき
をな久、其中今ハ連用こそそ
きよ上を添へ、希求のこハ
とハなせるあり、

「用云あり、波行四段よまひふ
へと用らくなり、其オニ音六、
截断と連躰との二つの活用
を兼る音かろるを、今ハ連躰
のこよそ用へるこそ、乃チ紐
鏡と云躰云へつゞきたり、

「用云あり、羅行四段よらり
るれと用らくなり、其オニ三
音ハ截るく連くの二の活
用を兼る音かろるを、今ハ
連躰の方こそつらへるこそ、
乃チちとといハ神云へ連
きたり、

「是も無形
躰屬
云ふ屬
云上の
句へへ
らるり、

「是も無形
躰屬
云ふ屬
云上の
句へへ
らるり、

「是も無形
躰屬
云ふ屬
云上の
句へへ
らるり、

「是も無形
躰屬
云ふ屬
云上の
句へへ
らるり、

「是も無形
躰屬
云ふ屬
云上の
句へへ
らるり、

天
本
毛
三
一
う
わ
は
云
を

天尔を波ハ漢文よハ點圖の
言ハ夢の飛ハ扶惜士ハ
心ハ一ハおハるをハハ
里ハはハる案ハハハハハ
後ハハハハハハハハハハ
身ハハハハハハハハハハ
神代ハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

當代保元のことんほねよ東岳のさあ
 幾りも法よりや〜 歌入り母
 出わねいり〜うらま〜 葉うらま
 彼らと和俗のおら〜未ね〜
 へ安歌よまむ〜母又〜むよ素直の
 へ〜よなをま〜い〜 歌〜
 へ〜よ授〜も備〜す〜の響〜
 つ飛り〜自他の節〜す〜の〜
 へ〜

社よと契おや〜あり〜社安んよ
 へ〜おのつ〜れ〜の虫〜
 へ〜はや〜ぬわ〜のな〜
 へ〜鞍屋翁の節〜も法を〜
 へ〜葉の〜はの本葉の〜
 へ〜字法〜もき〜あり古の〜
 へ〜を大〜く〜ある〜
 へ〜より〜天り〜を伴の〜
 へ〜

并きよくは凡くわあり業のわく親く
 在依義門師のこり立の法
 是より付みたる厚味よりわれ
 多々来り来り居るらの年月と察
 分ゆよてらるる一もたをとり
 一いぬ縁を統らたまひの二
 素よりあまの師の法よりわら
 悦より多るのよと華一わら

書ともよ志とよるるわはあ業師の
 歌又よ心をわらあわら
 白法まやとわらわの情士にわら
 万をはを志しあまのよよ
 来り喜よるる一城一あまの
 年よけらるる一法よら
 改めあ聖法俗語よとわら
 知らぬよとわら一歌又をわら

くる類々やういふ是等の書よりり言
 漢籍の點々も古き所を改めて訂
 の本末を正しくしなむ所 難波津あた
 りいさきころんほよりりおこりり
 こり教諭を勤まなげりりりりりり
 かの書よりりりりりりりりりりり
 成はすのれりりりりりりりりりり

天保十二年六月

加納諸平

和漢洋書日籍
 并法帖類賣買

西京寺町通綾小路下町

製本所

川勝徳次郎



